
魔法少女リリカルなのは～おっさん転生による影響～

CI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜おっさん転生による影響〜

【Nコード】

N7455Q

【作者名】

C1

【あらすじ】

木島要というエリート街道を歩くキモいおっさんがいた。勉強良し、運動良し、だけど見た目最悪のおっさんが突然知識もないのにリリカルなのはの世界に転生した。この話は30になるつかというおっさんがよくわからないまま動いていく、そんな話です。

第一話、おっさんフェイト似になる

きしまかなめ
木島要という男がいる。

年齢30にもなるうかというおっさんである。

——まあ俺の事なんだが、

運良く一流大学に通う事ができ、その後も大学院への進学、大企業への就職を果たした。

真面目に生きてきたおかげでそれなりに頭は良いし運動も平均以上には出来ている。

自分に問題があるとしたら容姿ぐらいだ。

太りやすく痩せにくい体質、顔もキモいレベルだろう。

勉強できたおかげで酷い扱いもありされずに済んだ。

勉強も運動も出来なかったらと考えると恐ろしくて足が震えるほどだ。

さて、一通り俺の事を知ってもらった所で、俺の現状を知ってもらいたい。

別に興味もないだろうが俺にとっては命にかかわる事なんだ。

目の前に4tトラックが迫ってきていた……

ゴシャ

多分そんな音がした。

俺の意識はその音が聞こえるのと同時に電源ケーブルを引っっこ抜か

れたテレビのようにブツンと途切れた。

（まだ食べてないのになあ）

最後に思ったのは5分程前にコンビニで買った“俺のエクレア”のことだった。

目を覚ました。

辺りを見回すと周囲に何があるかもわからない程の闇で覆われていた。

（どこだここ？）

手を前に突き出し歩き出したがどれだけ歩いても壁に手がつく事はなかった。

地獄だろうか？天国が実は真っ暗だったらやだな……

こういう時、小説とかだと神様なり悪魔なりが出てきて可笑しな力をくれて異世界に跳ぶのがセオリーだが、30にもなるってのにそんな有り得ない事を信じる事は出来ない。

「有り得ないは……有り得ない！！」

声がした。

何だろうとつかで聞いた事があるな？

あ、あれだ。最近あつた親戚の武士君（21歳、大学三年、重度のオタク）が好きだったアニメのキャラの声と同じなんだ。

あのクルクルのおっさん、何ていったか……ブリタニアン浩平だったけ？

ポチッ

なんかボタンを押したような音が聞こえたばあ！！

ドロップハンマーを思いつきりぶつけられたような衝撃が俺を襲った。

「よゝやくうゝ話があ出来るようだなあゝ！！」

「人はあ平等ではなあい！貴様は選ばれたのだあ！——」

「

何か言っている気がしたが、衝撃によつて俺の意識はあつさりと断ち切られたので全く耳に入らなかった。

トラックに撥ねられて死んだと思ったらドロップハンマーで殺された。

訳がわからねえと思うだろうが俺自身何が何だか分からなかった……

目が覚めたら闇に覆われた場所ではなく、かといってトラックに撥ねられた場所でもない。

廃墟のビルに俺は横たわっていた。

月が雲に所々隠されながらも光を放つ。

「ん、しょつと」

ボロボロの柱を支えにして立ちあがる。

「なんか……視点低くないか？」

声もなんか違うような……

頭を下げ、月明かりに照らされている自分の体を見下ろす。

着ていたスーツじゃない。

黒い、フリルのある、女の子が着る様な服である。

完全肥満型の体型は細い、華奢な体つきになっている。

ブクブクに膨れていた手足は華奢になった体に合わせたかのようにほっそりとしている。

そして、べったりとしていた黒髪は

—— 金色になって腰辺りにまで伸びていた。

落ちていた元は窓だったのだろう、大きなガラス片に映る俺は俺じゃなかった。

金髪赤目の超美少女に姿を変えていた。

第一話、おっさんフェイト似になる（後書き）

ついカツとなってやった。
後悔も反省もしていない。

だけと思う。

何でこんなの書いたんだろ？

第二話、おっさん捕まる

床に散らばるガラスに映る金髪の美少女になった自分の姿を見て、体感数分（現実では数秒）ほど啞然としていた。

努めて冷静にペタペタと顔、胸、股間へと触っていく。

（ない……ない！）

胸の膨らみこそないが股間にあつた愚息が無くなっており、自分が完全に女の体になっていると認識した。

あまりに現実味のない話だ。

ただど視覚と触覚が伝えてくる情報から認めざるを得ない。

（美少女つてのが救いかなあ……）

これで不細工だったら現実を認められずに自殺しかねない。

ほっそりとした新しい体を一通り確認した後、俺は廃ビルを抜けどこかもわからない夜の街へ歩き出した。

歩き出して数分としないうちに可笑しな光景を目にした。

交差点の中央に人魂のような青い光が浮いていた。

「なんだ、あれ？」

ゆらゆらと燃える様に光る人魂、それに引きつかれるように足が勝手に進んでいく。

シコウモウマクデキナイ

メニウツルヒトダマカラメヲハナセナイ

「――」

ダレカノコエガキコエタケド、オレノミニニハハイラナイ
メノマエニアオイヒカリ、アオイヒカリヲハナツイシノモトニタド
リツイタ

「――！――」

サケビゴエガキコエル

ダレカガチカツイテクルノガ、ボケタシカイニウツル
アオイヒカリヲハナツイシガ、オレノムネニスイコマレル

(……あれ？)

石が胸に吸い込まれ、青い光が収まると意識がはつきりする。
なんだ？青い石を見た瞬間、気が遠くなって……
なんだか胸が熱い。

胸の中に炎が燃え盛っているみたいだ。

その炎の熱は胸から体全体に広がっていく。

熱い

アツイ

あつい

胸を押さえて膝を折り曲げ蹲る。

「そんな、ジュエルシードが……」

先程近づいてきていた人だろうか？
丸まって視線が下を向いているため足しか見えないが、声からして
女の子だろう。

「どうするんだいフエイト！」

奥の方からもう一人女性の声が聞こえるが、姿を確認する前に体全体が熱くなり耐えられなくなって俺は目を瞑った。

「この子、凄い量の魔力が体中に駆け廻ってる。ジュエルシード、この子のリンカーコアと融合しちゃったかも……」

「そんなことがあるのかい？」

「わかんない……そんな記述はなかったし、……母さんならわかるかな？」

「そうだね、アイツに調べて貰おう。そうと決まったらさっさとずらかろう！あっちの子も気が付いたみたいだよ」

「うん」

歯を食い縛って熱に耐えている俺は誰か（多分ずらかろうと言ってた女性）襟元を掴まれ、一瞬後に浮遊感と突風が俺を襲う。

熱に耐えながら片目を薄くあけるとコンクリートで覆われた地面が見えた。

（空！飛んでるー！！）

訳がわからず手足をバタつかせたかったが上手く体が動かない。次第に俺の意識が落ちて行くのを感じた。

目が覚めると、暗い部屋の床に転がされていた。
体中を襲っていた熱は消えている。

全部夢だったのではないかと思い自分の体を触るが、触覚情報は自分が元の自分ではないと伝えてくるし、青い光を放っていた石が入っていた胸に違和感がある。触った感じは何ともないが、なんと
いづか胸の中にもう一つ、心臓が出来たような感じがするのだ。

「目が覚めたかい？」

部屋に電気が付けられ照らされる。

突然の事に目を眩ませ、目の上に手をかざして声のした方向を見る。

「えっ!？」

思わず声を上げた。

目に映ったモノが信じられなかった。

ドアのすぐそばに立ち、電気のスイッチに手を伸ばすオレンジ色の
髪をした女性と――

の自分がいた。

——その横にもう一人

自分と違い、長い金髪をツインテールにしていることと、服装以外全く同じ少女が黙ってこちらを見ている。

（何これ、何これ！何これ！！）

ドッペル？ドッペルさんなの！？

「あんた一体何なんだい？突然現れてジュエルシードを取り込んだかと思えば苦しみだすし、とりあえず捕まえてみればフェイトと同じ顔してるし……」

オレンジ色の髪の女性が髪をグシャグシャと掻きながら訳わからーん！！と叫ぶ。

叫びたいのはこちらの方だ。

そう思いながら女性を見ていると自分に良く似た少女が歩み寄ってきた。

「ジュエルシードを出して」

ジュエルシード、思いつくものが他にないからきつとあの石の名前だろう。

でも出してって言われても……どうやって？

「バルディッシュ」

“Yes sir.”

俺が黙っているのが気に入らなかったのか、少女が小さく呟くと少女の手には黒い斧が握られ、チャキと音を立てて構える。

「ちょ、と待つて！俺自身何て説明したらいいかわからなくて黙ってただけで喋りたくない訳じゃない！！」

俺が慌てて言うのと、とりあえず許してくれたのか斧を下ろしてくれた。

「驚いた、声もフェイトと同じだ……」

オレンジ髪の女性が驚愕する。

（同じなんだ、自分で声を出す時に聞こえる声は骨導音だからフェイトってこの声とは違う感じるんだけど……）

どうやら骨導音と気導音の違いというだけらしい。

見た目だけでなく声も同じだという事は、もしかすると――

「説明、して。ジュエルシードをどうしたのか、あなたが私に似ている理由」

思考に耽りそうになった所で少女の声に現実に戻される。

説明かぁ、何ていえばいいんだろう？

（おっさんだったんだけど気が付いたらこの身体になってました。

うん、間違いなくキチガイさんだな。病院に送られるか、ふざけてると思われて最悪殺されるかも……）

「えっと、ですね――」

少女に上手く説明するため頭をフルに回転させる。

「正直、俺自身どうしてこうなったか分からない。

目が覚めたら廃ビルに転がってて、とりあえず外に出て歩いてた

らあの交差点まで辿り着いた。

ジュエルシード、だっけ？アレが交差点の真ん中で光ってんの見たらなんか意識が朦朧としてきて、気が付いたらあの石が俺の中に入ってた。」

こんな感じでどうだろう？

嘘は一切ないよ！話してない部分があるだけ！！

オレンジの髪的女性と少女が顔を見合わせて何やらコンタクトを取っている。

アイコンタクトだろうか？

なんか顔見合せてるだけで頷いたりしてますけど、まるで細かい打ち合わせでもしてるみたいなんですけど……

「嘘は、言っていないみたいだね。」

オレンジの髪的女性がこちらに顔を向ける。

よかった、荒唐無稽な話だけど信じてくれた。

「で、アンタ名前は？」

名前？

何て言おうか……男だった時の名前を使うのは躊躇われる。

女でも要^{かなめ}つて子はいるだろうが、今の自分の見た目は金髪で赤い目、どう見ても外国人だ。

要何て日本人みたいな名前を言っていないものだろうか？いやだめだろう。

とすればどうする？

吾輩は美少女である。名前はまだない、ああ混乱してきた。

えーと、えーと……

あああああああああ

「フィン、です」

混乱の末、男だった時に最後に行った外国の名前が出た。

第三話、おっさん慣れてくる

俺がフィン（咄嗟に出た偽名）と名乗った後、ここに俺を連れて行った二人も名乗った。

オレンジ色の髪をしたエロい体つきの女性がアルフで、今の俺の姿とそっくりな少女はフェイトというらしい。

そして彼女達から自分の体に起こったことを説明してもらい、魔法の存在を伝えられた。

そう、魔法である。

子供の頃に見ていたサ。ーちゃんとかが使っていた魔法である。当然そんなもの信じられるはずもなかったが、フェイトの服が一瞬にしてスクール水着にマントの姿になったり、アルフがフェイトの使い魔だと言って本来の姿、狼だか大型犬だか知らないがオレンジ色の動物に変身したのを見て認識を改めた。

「で、アンタの中に入っていたのがジュエルシールドって石。ジュエルシールドは魔法を使うのに必要な力、魔力がたまり溜まってその力を使えば一個で世界を壊せるほどなんだとさ」

アルフが面倒そうに教えてくれる。

ちなみに今の彼女の姿は犬、後ろ足で耳の後ろ掻きながら喋っており話し方と合わさり緊張感の欠片もない。

深刻な話だと思ってたんだけど？

「まっ、明日フェイトの母親のところに連れてくからアイツに何とかしてもらいな」

アルフはそう言って立ちあがりフェイトを連れて奥の部屋へと姿を

消した。

とりあえず今晩はここに泊っていいらしい。
俺はソファーに横になって目を閉じた。

（今日はえらく長く感じたなあ）

出来れば夢であって欲しい。

ここにいる事じゃなく、事故に遭うこと自体が夢だったら…と淡い
期待を持ちつつ意識を闇に預けた。

人の夢と書いて夢いと読む。

これは誰が最初に考えたんだろう？

俺はその人を許さない、絶対にだ！！

目が覚めた俺は自身の体を見て現実を思い知った。

（夢じゃなかった……）

鬱だ。

超がつく程の美少女になれたのだから、ある意味では嬉しい事ではある。

だが、その事を素直に喜んでいられる程俺は楽家ではない。

思い浮かべるのは昨日の朦朧とした意識の中での出来事。

俺は何故か青い石、ジュエルシードが体に入ってしまったているのだ。いくら美少女になれても体に異常持ちでは不安の方が大きい。

いや、これでは女の体になったこと自体は嬉しいみたいだ、それは違う。

それなりに長く生きていたから女性の大変さはそれなりに分かっている。

生理がある。痴漢被害やら、男からの性的な暴行など被害者になる可能性が高い。仮に性交をするとしても妊娠の可能性を考えねばならんし、出産だって大変だ。

「ああ、ようやくお目覚めかい？」

アルフが俺の顔を見て、随分良く寝るねと言う。

入ってきた扉は玄関へ繋がるモノだったからどこかに行ってきたのだろう。

朝早くから元気だねえ……

「何言ってんだい。もう昼過ぎだよ。」

うそ！

俺は窓に向かつて太陽の位置を調べる。

窓から見える太陽は確かに高い位置にある。

本当だった。

ん、なんで時計を見ないのかつて？

ないんだよ、この部屋。

時計だけじゃない、テレビも本も新聞も、キッチンには食器だってない。

あるのは俺が寝ていたソファーとガラスの小さなテーブル、携帯食料のゴミが詰まったゴミ箱くらいである。

正直本当にここで暮らしているのか疑いたくなる。

「あ、起きたんだ……」

アルフの後から手に何かを持っているフェイトが部屋に入ってきた。ケーキでも買ったかね？そんな感じの箱だ。

俺が箱へ視線を向けていることに気付いたフェイトは「これは駄目」と言って、背中に箱を隠して代わりに戸棚から携帯食料で有名なブロッコ状のお菓子をくれた。

何この子？めっちゃ可愛い！

フェイトの拳動にやられつつ、俺は彼女から受け取った力。リーマートを食べた。

（フルーツ味が、チョコ味が好きだがこれも有りだ。）

モグモグ

「フィンも起きたし、行くよアルフ」

フェイトが何かアルフに言った。

ああ、今日フェイトの母親に会って自分のことを調べて貰うんだっけ。

モグモグ

アルフが何やら渋い顔をしているのは何でだろ？

怖い人なのかなフェイトのお母さん……

まあさすがに見ず知らずの人間である自分にいきなり敵意を向けてくることはないよね？

娘に似てる訳だし――

ドゴッ！！

ズシャアアア！！

有り得ない。

フェイトに彼女の母親、プレシアさんを紹介してもらったと思ったらいきなり攻撃された。

どういうことなの！？呼吸も上手く出来ないんですけど！！

あ、ちなみに二つ目の音は俺が攻撃を喰らって床を滑った音ね。摩擦熱で床と擦れたところがすごい熱くて痛いです。

「フェイト、どういうことなのコレは」

ものすごく不機嫌そうなプレシアさんに名前を呼ばれたフェイトが体を大きく震わせ、なんとか俺の経緯を離す。

暴走したジュエルシードに近寄った俺に何故かジュエルシードが入ってしまった、どうすればいいのか分からず指示を仰ぎに来た。

「ジュエルシードが体に？」

フェイトの話を聞いてプレシアさんがツカツカと音を立てて俺の元に来る。

怖いけど自分は未だプレシアさんからの攻撃で悶絶中です。

「凄い魔力反応はそのため？ジュエルシードを取り込む存在……人

形と同じ顔……………」

何かブツブツ呟いててすごく怖い。

「母さん……？」

フェイトが恐る恐るといった感じにプレシアさんに声をかける。

「そう、なの……フフなんてこと。今頃になって起動するなんて……でもなぜあの世界に？いいえ、そんなことはどうでもいいわ！！」

！！

うお！吃驚した。

フェイトの言葉を見殺してブツブツ呟いていたプレシアさんは突然大声を出した。

空気にフェイトもびっくりしたっぽい、ようやく痛みが引いてきて少し頭に余裕が出来たからわかった。

俺は顔をゆっくりとプレシアさんの方へと向けると、

「ああフェイト！！よくやってくれたわ！！」

いきなりフェイトを褒め始めた。

訳がわからん！

失礼だがこの人頭大丈夫だろうか？

「かあ、さん？」

フェイトもプレシアさんの急変に驚いていた。

そりゃそうだろう。人をいきなり吹き飛ばしたかと思えば褒め出す

んだもん。

驚かない訳がない。

「えっと、かあさん。どうしたの？」

恐る恐るフェイトがプレシアさんを怒らせない様に質問する。

「フェイト、この子は母さんの願いを叶えるために必要な子だったの！よく見つけてくれたわ！！」

よく事情はわからんが、何か勘違いなさってないだろうか？

自分は貴方のことなど知らんのですが？

そう言いたいはまだ喋ることが出来ない俺。

身体が痺れて動けない。

俺が何とか喋れるようになる頃にはプレシアはフェイトを褒め、「今度はもっとジュエルシードを集めてくるのよ」と言ってフェイトを追い出した。

フェイトはなんか、すごい嬉しそうな顔をして頷いていた。

そして大きな部屋は俺とプレシアさんの二人になった。

「フ、フフ、フ」

「……………」

空気が重い。

先程までフェイトに向けていた笑顔は完全に消え去り、口を釣り上げクツクツと笑うプレシアさん。
マジ怖い。

洩らしそうである。

「えっと、」

あまりの空気の重さに何か言わなくてはと思い俺が口を開く。
何でもいいから何か話題、話題、話題

「フォトンランサー、フアランクスシフト」

プレシアさんが何事か呟く。

え、何？

ってなんか出てきたあ！！

俺の中でシグナルレッド警報が発令。

アレはかなり危険！！

全力で回っ…

あ、無理だこれ。

眼前を塗りつぶす程の迫りくる光球に自分には回避出来ないと悟る。

（なぜ、俺がこんな目に……）

俺の体に無数の光球がぶつかる。

10発目をテンブルに喰らったところを最後に俺の体は意識を手放した。

一体何度意識を手放してるだろうか。

俺は意識を失うのに慣れてきてることに軽く驚愕した。

第四話、おっさん始まる

フェイトの母親、プレシアさんに攻撃され意識を失った俺が目覚めたのは事が終わってからだった。

目が覚めたら素っ裸になった身体は何かの液体に浸かっていたかのようにびしょ濡れ、辺りの床は所々に穴が空き、地面の代わりに変な空間に繋がっていた。

その穴の一つにフェイトが手を伸ばしていたが何か落としたのだろうか？

俺は地面に落ちていたプレシアさんが身に着けていたマントを身体に巻き付け、フェイトの元へ歩いていく。

何やら身体が重く上手く体が動かず、少し動かすだけでもしんどかったがなんとかとフェイトの元に辿り着く。

「フェイト」

声も上手く出なかった。

何だろう？まるで長い間動けなかったみたいだ。

ズシャアアアア！！

俺とフェイトがいる場所以外の床が崩れ落ちる。

ここにいるのは危険だ。

「ほあフェイお！ここかあはあれうよ！！」

そう思って、未だ穴に向かって手を伸ばしたまま穴の中を見ていたフェイトを立ちあがらせて肩を抱いて出口を探す。

床のほとんどが崩れてしまっている。

唯一残っていた細い道を辿って出口まで向かおうと一歩足を踏み出すと、

ズズッ

ちょうど俺とフェイトのいる場所が崩れた。

死ぬ!!

そう思って目をつぶりかけた俺に天の声が聞こえた。

「フェイトちゃん!!」

「フェイトオ!!」

白い服を着たフェイトと同じくらいの少女とアルフがこちらに飛んでくる。

ギリギリのところで救援が来たようだ。

（助かった……）

フェイトを白い服の少女に渡し、俺はアルフに掴まり脱出した。

何とか命を繋いだ俺はアースラとか言う次元空間航行艦船（まあ宇宙船みたいなものだろうと思うとく）の医療施設で検査を受けなが

ら事情を聴いていた。

どうやら俺がプレシアに会ってから何日もの間俺は彼女に拘束されていたようで、身体が上手く動かせないのはそのせいだろうとの事だった。

しかも俺とフェイトはプレシア・テスタロッサがつくった人造生命体というもので、世の理から外れた存在であるらしい。

「へー」

「へーって、それだけか？」

俺に事情聴取をするべく簡単に事態の流れを説明していた管理局の執務官、クロノ・ハラOWNは俺の反応に呆気にとられていた。

彼の反応を見る限り、きつとフェイトは凄い反応だったのだろう。

そして自分もそんな反応をずっと思っていたに違いない。

だが甘い、甘すぎるよクロノ・ハラOWN！！

こちらら死んだと思ったらこの姿になっていたり、石が体内に入ってきたり、魔法という摩訶不思議ファンタジーが実在することを教えられ、実際に見て認められずにはいられなくなったりと驚く事に飽きてきつつあるのだよ！！

それと同様に何度も意識を失うことにもなってるし、痛いものにも若干慣れてきたよ……

「君はプレシアがはじめに作った試作段階のモノだったように色々問題があったようなんだ。」

「問題？」

「ああ、資料とかは失ってしまっている為現段階ではプレシアが言

っていた範囲のことしかわからないが、彼女に作られた当初の君には自我がなかったようだ。」

クロノが言うには自分は人形のような物だったらしい。

(じゃあ自分は空っぽの器に入ってきた感じなのかね?)

元の意識を追い出して生きているんじゃないかと懸念していたのだが杞憂であつたそうだ。

何故意識を持ったのかわかるか?と聞いてくるクロノ、この身体にもとから意識がなかった訳だし他の人間の意識である事を伝える必要はないだろうと考え、頭を横に振つた。

クロノは予想通りだったのかどうでも良かったのか、そうかと呟いて話を続けた。

「君の体も少々おかしい事になっている」

クロノは俺の診断結果の映つたモニターを表示させ、

「君の体には老いがない」

と言つた。

(?)

おいがない?

老けないってことだろうか?

まさか甥がいなくてことじゃないだろうか?

「信じられないかもしれないが、これはきちんと調べられた結果だ。君は一生その姿で生きて行くことになる。」

トレーニングをすれば筋肉は付くし髪は伸びるらしいが、とクロノが説明を続けるが俺はそれを聞く事は出来なかった。

老けない。

つまり一生子供の姿で生きる。

「免許取れない」

「え？」

「通勤手段が電車か自転車、歩きのみ……」

「お、おい？」

「そもそもこの姿じゃ働けない!!」

絶望する。

親も戸籍もなく、働く事も出来ないとかどうやって生きてけばいいんだー!!

「大丈夫か？」

「ごめんなさい。少し動揺しちゃって……」

「まあ異常な事だからな。動揺もするだろう」

この少年優しい!!

「それともう一つ、重要な事を君に伝えなくてはいけない」

クロノは真剣な表情でこちらを見つめる。

かなり重要な事みたいだ。

思わず唾を飲み込んだ。

「君の中にジュエルシードが入っただろう。アレに関する話だ」

ああ、あつたねそんなもの。なんか危険なんだろうか？

「君の中に入ったジュエルシードは全部で9つ、君は意識を失っていただろうから知らないだろうがプレシアは手に入れたジュエルシードをすべて君の中に入れていた」

あの人、一体人を何だと思ってるんだろうか

自分の作ったものだからどうしようと思手でしょ、とかいうつもりなのかね？

変な石を勝手に入れるなってんだ。

「その君の中に入ったジュエルシードはすべて君のリンカーコアと融合してしまつたんだ」

神妙な面持ちでクロノが言う、が俺には何の事だか分からない。

危険なことなの、それ？

「えーと、リンカーコアとかジュエルシードに関する知識がないのでよくわからないんですが……」

「そうか、魔法はわかるか？

そつだな、簡単に言つと、電気で機械が動くように、魔力で動くモノが魔法だ。

リンカーコアとは人が魔力を生成するための器官といった感じだ。ジュエルシードはもの凄く大きな魔力を凝縮したもの、かな。大きな魔力を持つジュエルシードが君のリンカーコアに融合した。つまり君の魔力がとんでもなく高くなっただ。それも星一つを消すのも容易に可能と言える程に……」

クロノ先生ありがとう、凄いわかりやすかった。つまり、俺はとんでもなく危険な存在になってしまった訳だね。

「クロノ」

扉が開いて誰かが入室してくる。そちらを向くと緑色の髪の女性が立っていた。

「母さん」

母さん！？この人が？クロノの！？

クロノは14歳と言っていたから彼女が20で産んでいても34歳見えない。

どう見ても20代だ。

とても子持ちの人には見えない。

クロノの父親が羨ましい。

「フェイトさんから聞いたのだけど、フィンさんで良かったかしら？」

「えっ、ええ。そうです」

フェイトに名前を聞かれて咄嗟に出たんだよねフィンって、フィンランドに旅行に行った帰りだったからね。

「初めましてリンディ・ハラウンです」

笑顔で挨拶をするリンディさん。

優しい人だ。

プレシアさんのような狂気に染まった笑顔じゃないのがとても嬉しいです。

「クロノ、どこまで説明した？」

「事件の一連と彼女の身体の事を伝えたところです」

「そう

ねえフィンさん。

あなたの体が大変なことになっている事はクロノに説明をしてもらったでしょう？」

頷く。

「フェイトさんにも言ったのだけど、私をあなたの身元引受人にさせてくれないかしら？」

！！

「あなたの魔力の高さ、これを管理局はきつと危険なものと判断してしまう。」

「ああ、なるほど」

言いたい事が何となくわかった。

身寄りもなく、危険な程の魔力を持つ人間がどうやって生きていくか。

その魔力を悪用する可能性を危惧しているのだろう。

なにしろ星一つ軽々壊せる力だ。

危険でないはずがない。

「ところでフェイトはどうなるんです？」

事件のあらましを聞いた際に、フェイトが犯罪をしていたと教えられて疑問に思っていたのだ。

母親のためとはいえ、そんな理由では普通許されないだろう。

「裁判になるだろうが、まあ大丈夫だろう。保護観察程度で済むよ」

クロノが教えてくれた。

え、許されんの？

「フェイトさんのような小さな子にとって、親の願いや命令がどれだけ大切に逆らいがたいものかは法律がちゃんと証明しているわ。だから大丈夫」

マジすか。

日本の法律はそこを証明してたかなあ？

「その際、保護観察に私になってフェイトさんの面倒を見ることになるんだけど、

フィンさん、あなたはどうする？」

フェイトさんは多分あなたが一緒の方が喜んでくれるわ。と付け足してくる。

正直願ったり叶ったりだがいいのだろうか？
何か裏がないか勘ぐってしまう。

「将来、」

「え？」

管理局で働けと強制しないだろうか？そう言いかけて止める。
それはあまりにも失礼だ。

「いえ、その申し出有りがたく受けさせていただきます」

俺は頭を深く下げた。

こうして俺、フィン・テストロッサの物語が始まる。

第四話、おっさん始まる（後書き）

実は今までののは全てオープニングだったんだよ！！

ΩΩΩ ナ、ナンダッテー！！

なんか全然おっさんぽくないな。

まあ精神は肉体に寄ってくるっていうし、いいか。

第五話、おっさんの一日 訓練編

フェイト達の起こした事件、PT事件と呼ばれるものが終わって早1カ月が立った。

リンディさんの言った通り、フェイト達は裁判で保護観察が言い渡され俺と同じくハラオウン家に引き取られた。

母親であるプレシア・テストロッサが虚数空間という落ちたら出られない所に消えた為若干防ぎこんでいたが、アルフやハラオウン家、その他様々な人のおかげで元気になって、最近ではあの事件で知り合った高町なのという少女とビデオメールで近況報告をし合っているらしい。

そしてジュエルシード9個分の魔力保有者となった俺はというと、

『基礎プログラムは終了です。では続いて実践プログラムに入ります』

地獄を味わっていたりする。

とんでもない魔力を持つ俺が暴走してしまうと世界の危機になってしまうため、魔力の扱い方をスパルタで教えられている。

魔法世界の歴史、魔法の知識、魔法を扱う為の勉強と複数の教科を同時に教えられている。

（マルチタスクは便利であるが同時に12科目は脳の処理が追いつかない……）

『余計な思考があるようなのでもう二科目追加で今後行います』

ひー！！

勉強時に余計な思考をすることになる。

最初は2つだったのが今では14つ同時進行に……

（死ねる）

俺の首に紐で掛けられた黒い立方体型のインテリジェンスデバイス、名前はレグザ。

こいつが俺に魔法のことを教える先生となっている。

基本待機形態だが、戦闘プログラムを行う際は柄と鍔だけの刀身のない刀になる。

刀身を魔力で形成することで魔力の調節などを学ばせてくれる。

初めてのシミュレーションで魔力刃の形成法を聞いただけの状態でやった時は天まで届く程伸びてしまった。

レグザの教育のおかげで、今では10センチ間隔で伸び縮みが可能となった。

『まだ思考がありますね。今日から実戦プログラムの難易度をvery hardに変更』

ギャー！！

「ただいま……」

マルチタスクによる複数科目同時履修を6時間、その後3時間の演習で身も心もボロボロになりつつ帰宅する。
子供の姿の方が大人の時より忙しいとはこれいかに？

「おかえり姉さん。…お疲れだね」

苦笑しながら迎えてくれたのは妹となったフェイト。
保護観察中で基本的に外出は出来ないので家の仕事と座学が彼女の基本生活となっている。

なんでも管理局に勤めんだってさ。
嘱託の扱いは給料少なめになるらしいんだけど彼女は喜んで法などを勉強している。

俺とフェイトがやっかいになっているハラウン家の長男、クロノ・ハラウンはフェイトなら執務官も夢ではないとの事。
ちなみに俺も教官レグザさんの手によって法律とかも教えられている。

『妹に負ける姉の存在に価値なし』とは教官の言。

どうやら俺を何においてもフェイト以上に強くするつもりでいるらしい。

俺個人としてはお断りしたいのだが、もし拒否したところでプログラムの難易度が上がるだけなので言わない。これ以上は本当に死ぬ。

「ただいまフェイト。リンディさん達は？」

「まだ。クロノはもうすぐ帰ってくるみたいだけど、リンディさんは遅くなるみたい」

保護観察中の観察対象ほつといていいのかなあと思いつつ、フェイトと俺の部屋に行って着替えを手に取りお風呂に向かう。

「ご飯はクロノが帰ってからでしょ？俺風呂入ってるね」

演習で大分汗を掻いた。

魔力量に制限設けてAランク3人の攻撃を3時間避け続けて身体はクタクタである。

使っていいのは飛行魔法と加速魔法のみで一時間避け続けるのが目的、一発被弾することに10分つつ演習が延びるという地獄仕様。しかも演習相手は12人を4組に分け、交代で俺を攻めてくる。

（演習は本当に厳しい）

初めてやった時は相手が全員疲労で倒れるまで終わらなかった。

服を手早く脱ぎ脱衣籠に入れてシャワーを浴びる。

もう女の子の体にも慣れてしまった。

20分程風呂でゆっくりと筋肉を解したりして出る。

「ふう」

さっぱりした。

ガラス（俺が風呂場のドアを開けた音）

「！！！」

脱衣所にはクロノが手を洗っていた。

あ、帰ってきてたんだ。

俺の姿（全裸）を見て硬直するクロノ14歳。

「あ、あ……あ」

動揺しまくりのクロノを見つつ冷静にタオルで身体を拭く俺。
すっげえ顔真っ赤。思春期だねえ……

「お帰りクロノ」

「あ、ああ。た、だいま」

女の子になって大変なのが髪の毛だ。

俺の髪を長く、腰辺りまである。

切ろうかと思ったのだがフェイトやリンディさんに止められた。

フェイトは自分とお揃いであって欲しいようにで鬼気迫る顔で止められたのを覚えている。

「で、いつまで見ているのかね思春期少年」

いまだ手に水を掛けたままこちらを見て固まるクロノに一言。

「え、あつと、スマン！！」

そう言つて慌てて脱衣所から出て行つた。
手、濡れたままだけどいいのかな？
どうでもいいか。

『貴方はもう少し恥じらいを覚えるべきです』

レグザが明滅を繰り返しながら言う。

「見るだけなら別にいいよ。映像を残そうとしたり手を出されそうになつたら全力で排除するし」

俺の全魔力の何億分の一の出力で作つた魔力誘導弾、アクセルシューターは直径100メートル、高町なのはのスターライトブレイカーよりも高威力なのである。

誘導弾一つで国が壊せると普段演習をしてくれる相手の誰かが言っていた。

『……』

レグザが沈黙したところで話を終わらせ、下着を着てその上にシャツと膝丈のズボンを穿いてリビングに向かう。

「フェイトにアルフ、お待たせ。ご飯にしようか」

「うん」

「待たせ過ぎだよ。もうお腹ペッコペコだ」

「ごめんごめん」

リビングでソファ―に座ってテレビを見ていた2人に声をかけて台所の料理を温める。

リンディさんが仕事で遅れる時は大抵作っていてくれるので、それを温めて食べるだけである。

スープを温めつつ周囲を見回すがクロノの姿がない。

「クロノは？」

フェイト達に聞いてみる。

どうせ脱衣所で俺の裸を見て、俺と同じ体格、顔のフェイトを直視できずに部屋に引き込んだのだろう。

「さっき手を洗いに行って出てきたと思ったら部屋に戻ったみたい」

随分慌ててたよ？と首を傾げながら説明してくれるフェイト。

クロノ、予想通り過ぎて笑えもしねえよ。

しょうがない。

少しは俺のせいだ。

フェイトに料理を任せて俺は思春期の少年を呼びに行くことにする。

「おい、クロノ」

ガタッ！ゴシヤー！！

椅子の倒れる音がした。

うめき声も聞こえる辺り結構痛そうだ。

「な、なんだ？」

「ご飯、できたよ」

「あ、ああ。わかった。でも、後で食べるよ。今日中に終わらせなくちゃいけない仕事があるんだ」

声が上がってる。

どう考えても俺と顔を合わせられないだけだろうに、まあ思春期なものね。仕方ないよね？そう思い、

「そう、わかった」

と言ってリビングに戻る。

これが彼の初めての自家発電になるとは俺は知らなかったしどうでも良かった。

「クロノは？」

俺1人が戻ってきたことに疑問を持ったフェイトが聞いてくる。

「クロノは忙しいから後で食べるってさ」

「ふうん」

「ま、クロノも執務官って役職についてるんだし忙しいんでしょう。」

3人で食べよう」

「うん、そうだね。アルフ牛乳持ってた」

「あいよ」

「じゃ、食べましょうかね」

両手を合わせて、

『いただきます!』

ミッドチルダでもコレがあるとは思わなかったよ。

そう思いながら俺は箸を持ってサラダの盛られた皿に手を伸ばした。

食事を終えた俺とフェイトは2人共同の部屋に戻り勉強を始める。
アルフは退屈そうに床に丸まっている。

フェイトは法の、俺はレグザの出した課題に取り組んでいく。

「姉さん、ここの術式はこっちの方式を当て嵌めるんだよ」

「あ、成る程」

時折フェイトから教えて貰っています。

フェイトと俺では持っている知識の量が違う。

必死に勉強してるおかげで差は縮まってはいるけどね。

黙々と筆を動かしていると、フェイトが声を掛けてきた。

「そっいえば姉さんってどういう魔導師なの？」

フェイトは多分、俺の戦闘スタイルの事を聞いているのだろう。

「んー、まだいろいろ教えて貰ってる段階だからそこまでキッチリ決まってる訳じゃないんだけど、

そうだね、フェイトと同じ高速機動型、かな。」

俺がそういうとフェイトは目を輝かせる。

「本当!!」

フェイトは何かと俺と同じようになりたがる。

髪の毛も俺が切るのを嫌がっていたし、服もお揃いの物ばかりだ。

そのせいで俺も何着かスカートを持っていたりする。

バリアジャケットも同じにしようと言われた時はゾツとしたね。

スク水にマントだけとか恥ずかしくて死ねる。

必死に説得してフェイトと同じように黒を基調としたモノにすることで何とか折れて貰った。

「でも、俺の魔力が凄い量だから被害が出ないような魔法しか使えないんだよね」

中距離用に誘導弾以外、シールド魔法や飛行魔法のような補助魔法と接近戦用の魔法しかない。

だから回避の訓練ばかりやってるんだけどね。

俺の攻撃方法は基本レグザの魔力刃による攻撃か、シールド魔法を使った状態で相手に突っ込み押しつぶすような攻撃ばかりである。ちなみにもし俺が全魔力をシールド魔法につぎ込んだら、ありとあらゆる攻撃を防ぐ完璧な盾を年単位で張り続けられる。

「そっか、じゃあ私の魔法あまり教えられないかも……」

フェイトが落ち込む。

そうなんだよね。

砲撃魔法とか懂れるんだけどね。

一応レグザの中に一つだけあるんだけど使う条件が色々あって試す事も出来てない。

「もつと魔力制御がうまくなったら砲撃魔法の使用も検討してくるってリンディさん言ってたし、その時は教えてね」

「うん!!」

フェイトの元気な返事にほんわかする。

この子ホント和むわあ

『集中なさい』

レグザの叱責を受けてレポートを書く作業に戻った。
上司の峰田係長より怖いデス。

「終わった」

手を伸ばして後ろに倒れる。

時刻は0時になるうかという頃。

フェイトとアルフは既に眠ってしまっている。

フェイトの寝顔を見て、俺は隣のベッドに入る。

さっさと寝なくては、明日の勉強に障る。

電気を消し、小さくお休みと呟いて目を閉じる。

第六話、おっさん努力する

魔法が常識の中に組み込まれている世界、ミッドチルダ。

そこでの常識やら魔法知識やらを徹底的に教え込まれて早半年、地獄の日々がようやく終わった。

現在身を寄せているハラウン宅で地獄の日々を思い出して小さく涙を流した。

ただ今、自分を褒めてくれる存在はいない。

『私がいます』

訂正、褒めてくれる人はいない。

ほんの少しだけ膨らみがある胸の上で点滅を繰り返す黒い立方体、自分の教育係となっているインテリジェントデバイスのレグザが講義をしてくる。

つてレグザさん、俺に地獄の日々を見せてきたのは貴方でしょう？

『教官であつた私が褒めることは問題でしょうか？』

「いや、問題はない、ないよ」

ないんだけどさ……

やっぱりに褒められたいなと、そう思うんだよ……

乾いた笑みを浮かべつつ一週間前の事を思い出す。

「姉さん、本当にいけないの？」

寂しそうな顔をするフェイト、彼女とリンディさん、クロノの3人は明日から管理局の仕事で明日から何日か掛け第97管理外世界『地球』へPT事件の事後調査やらをしに行くんだそうだ。

「ごめん」

「フェイト、仕方がないんだ」

俺の謝罪にクロノがフォローを入れてくれる。

「フィンはフェイトと違ってまだ管理局の人間じゃないんだ。それにフィンは魔力制御とかの訓練でこちらに残ってないといけないんだ。あまり無茶をいうものじゃない」

クロノの言う通り俺は今のところ管理局の人間ではない。

魔力制御も多少大雑把ではあるが被害が出ない程度に出来るようになったことを認められ、

リンディさんやクロノに勧められるままに空戦ランクA+の試験に合格、同時にA級デバイスマスターの資格を取っている。(AA以上に届かなかったのは使える魔法の少なさと魔力の多さに頼り過ぎという判断からとクロノに言われた)

そのおかげでリンディさんに一言いえば簡単に管理局員になれる。提督権限って凄い。

「でも、やっぱり姉さんも一緒に良かったんだ」

ごめんねと謝るフェイト。

そのさびしげな顔に俺は思わずフェイトを抱きしめる。

軽く驚きつつも抱き返してくるフェイト。

昔の姿だったら悲鳴あげられて捕まったな、美少女って得だ！
と思考がずれた。

「フェイト、俺とはすこし会えないだけだよ。それに向こうにいる
友達に会えるんでしょ？喜ばなくちゃ！」

フェイトの背中をポンポンと軽く叩きながら言い聞かせる。

「うん、そうだよね……」

いまだ暗い面持ちのフェイト、困った妹だ。

「——仕方ない。レグザ、残りのプログラムを最短で消化する
プラン。俺の負担を考慮せずに」

「え？」

『……2週間です。それ以上の短縮は不可能でしょう』

「負担を考慮せずにと言った」

『10日です。それが限度です』

「じゃあそれを一週間で終わらせる」

『不可能です』

「やると俺は言ったよ」

『……………了解しました。死を覚悟しなさい』

「ね、姉さん？」

「フェイト、俺は一週間で魔力制御を完璧に出来るようになる。それが終わったら直ぐにアースラまで行くから待ってて」

「ちょ、フィン！そんな無茶なこと出来る訳……………」

「出来る。出来なくても出来るようにしてみせる」

「無茶苦茶だ」

呆れるクロノ。

そう、確かに無茶苦茶だ。
だけどそれがどうした。

今ここにいる俺という存在そのものが十分無茶苦茶なんだからきつとそれぐらい出来る。

「やると決めた、だからやれる。俺はそういう存在^{もの}なんだよ」

昔も、そして今も

「あの、姉さん」

「フェイトは先に行ってて、直ぐに追いつくから。向こうに付いた

らフェイトの友達、高町なのはだっけ？ちゃんと紹介してね」

大丈夫、フェイトのお姉ちゃんは凄いいんだよ！と自分に出来る最高の笑顔をフェイトに見せる。

「うん！私、姉さんが来るの待ってるから！！」

元気になった。

やっぱりフェイトは笑っている顔が一番だ。

そして一週間経った今日に戻る。

『まさか本当に限界を超えとは思いませんでした』

レグザの言葉に驚きが入っている気がする。

リンディさんからレグザをもらった時に比べ、格段に人間のようになってきた。

AIがここまで人間に近づくとは魔法技術恐るべし、途中デバイスマイスターになるための勉強中に軽くいじったりしたからではないよね？バグとかはないし……

「じゃあ早速アースラのどこまで転移しようか？」

『座標はどうするんですか？管理局に問い合わせますか？』

「メンドイし、今は夜だ。さすがに迷惑でしょ」

『では』

うん、自分で探せばいい

バリアジャケットを展開し、レグザを待機状態から通常戦闘用のナイフモードにする。

右手に20センチ程の片刃の魔力刃の出た黒いナイフを持つ。

俺を中心に丸い魔法陣が浮かび上がる。

俺の魔力光はクリアブルー、この色はジュエルシールドの影響といわれているが特に問題はない。

「^{サーチ}探査魔法」

『展開』

探す。

目印はフェイトの魔力。

理由は俺の実力が戦闘といえる程度になったときから何度も模擬戦を行っていて慣れているから。

…

…

…

『感知』

じゃ、行きますか！

「転移!!」

『転送』

『転送完了』

「うん、ピッタリだ」

どうやら上手く転移できたみたいだ。
見覚えのあるアースラ、その医務室だ。
アースラで俺が初めて目覚めた場所でもある。
あれ、なんでここにいるんだ？
フェイトの近くに來た筈なんだけど……

「ねえ、さ、ん？」

「フェイト、ちゃんと追いついたよ」

「姉さん!!」

フェイトが軽く涙目でしがみついていた。

「フェイト? どうしたの!？」

何で涙目?

管理局に無茶な命令でも出された、てリンディさんはそういうことしなさそうだな。

フェイトを落ち着かせて話を聞くと、どうやら友達が怪我をしたらしい。

魔力を生成するリンカーコアを取られたみたい。

「そっか、辛かったね」

せつかく友達に会えたのに可哀想に

「ん、んん」

奥のベッドから女の子の声が、起きたのかな?

フェイトと一緒にベッドの横にあった備え付けの椅子に腰を下ろす。

「フェイト、ちゃん?」

「なのは……」

フェイトとなのはの目が合い、そしてなのはがこちらを向く。
あ、初めまして

「フェイトちゃんが、ふた、り？」

キュー

ドサッ（なのはがベッドに倒れた音）

あ、そつかすつかり忘れていたが俺とフェイトの顔は全くと言っていいほど同じである。
寝起きに見たら驚くわな。

「な、なのは！」

フェイトが慌てる。

ガラッ（医務室のドアが開く音）

「フェイト！緊急事態だ！！先程アースラに巨大な魔力反応が……」

クロノ乱入。

俺を見て、俺の隣でベッドに倒れているなのはに声をかけるフェイトを見て数秒の思考、事態を理解したのか手を叩き、成る程と小さく呟いてモニタを出して誰かに連絡を取る。

あ、嫌な予感

ブォン（俺の目の前にモニタ出現）

「フィンさん。少しお話ししましょうか？」

モニタには満面の笑みを浮かべたリンディさんの顔が映っていた。

『予想通りです』

「解決策は？」

『ありません。素直に怒られなさい』

ですよね！。

俺は覚悟を決めて処刑台へ歩き出す。
提督室

第七話、おっさん地球に立つ（前書き）

そういえば原作ではアースラじゃなくて補給地点みたいなところの医務室でしたね。すっかり忘れてた…
そもそもアースラ、整備中じゃなか…

まあでも次元空間航行艦船にも医務室くらいあるはずだし、何とかいけるはず

第七話、おっさん地球に立つ

「はい、本当に申し訳ありませんでした」

頭を下げて提督室を出た。

リンディさんによるお説教でクタクタである。

説教中に地球近辺から時空管理局本局まで戻ってきちゃったよ。

あゝふらふらする。

今日まで訓練漬けで疲労が限界に達していた上での説教、肉体的にも精神的にもピークである。

身体を左右に揺らしながら急遽用意してもらった部屋に向かう。
疲れた。

さつさと眠ろう。

でも、そう思って眠れたことは、あまりない。

「姉さん！」

「フィン！」

ほらね

フェイトとアルフに遭遇。

「あれ、フェイト。右手……」

さつきまでなかったフェイトの右手には何故か包帯が巻かれていた。

「あ、うん。今日の戦闘でちょっと……」

右手を背中に隠すフェイト。

うん、一々可愛いなこの娘は

「大丈夫？」

「うん、軽く痛む程度だから」

「そっか」

フェイトの顔を見て大丈夫と判定。

この娘はすぐに無理するから言葉だけで信じることは容易に出来なかったりする。

「そういえば、あの子は？」

高町なのは、フェイトが家にいた頃ビデオメールのやり取りをしてた相手。

たしか俺やフェイトをプレシアの家だか船だかよくわからないものから出る時に一度会った気がする。

「なのはは今検査中。アースラの医務室じゃわかんない事とか調べてんだって」

リンカーコアが異様に小さくなってるんだって、とアルフ

「リンカーコアが小さく、ねえ」

P.T事件で9つのジュエルシードとの融合を果たした俺のリンカーコアはとんでもなく大きい。

フェイトのリンカーコアをテニスボール程度とすれば、俺のは小さく例えても太陽（直径約140万？）といった感じだろうか。

「で、二人はどこに行こうとしてるの?」

部屋に戻っていいかな?

寝たい

「あ、フェイト。バルディッシュのことフィンに直してもらいなよ」

「え、うん。あのね……」

フェイトのデバイス、バルディッシュが中破、なのはのデバイス、レイジングハートは大破ですか。

それを直せ、と

フ、フフ、フフフフ……

「姉さん?」

「大丈夫、やる。やるよ……頑張るよ俺」

デバイスメンテナンス室ね。逝ってきまゝす

虚空を見上げつつメンテナンス室へ歩きはじめる。

また、徹夜かな

「レグザ」

『なんででしょう?』

「徹夜、何日続いてるかな?」

『今日で8日ですね』

「そっか」

『貴方の選んだ結果です』

ちよつと後悔しつつあるからあんまそれ言わないで下さい。

あ、ここだメンテ室

プシュッ

夜という事もありさすがに人は少ない。

デバイスのライセンスをA級でとるために何度も顔を出してた事もあり、咎められることもなく迎えられる。

あ、マリーさん

「今日来たインテリジェントデバイス2機。どこにあります？」

「あ、フィリちゃん！手伝ってくれるの！？ワイー！！」

子供が手伝うのを両手をあげて喜ぶ大人ってどうなんだろう

「私だって大人といえるほどの年じゃないもん」

まだまだ子供だもんと胸を張るマリーさん。

うん、威張るな

「で、バルディッシュ達は……これか」

うわ酷いなこれ。コアに罅^{ヒビ}入りまくってんじゃんか
フレームは自己修復で何とかなるね。

壊れたパーツ入れ替えれば元に戻るじゃん

マリーさんだけで済むんじゃ……

まあ頼まれたからにはやるけど

「足りないパーツは？」

「まとめて発注してあるよ。今日明日中には届くから」

じゃあ今あるパーツだけでも入れ替えておきますかね。

「じゃあやりますかね」

「うん、補佐は任せて！」

アンタが補佐かよと内心で突っ込みつつコーヒーを入れてブラック
で一気に飲み干す。

眠気を飛ばす。

デバイスを弄る時はちょっとしたミスで御釈迦になってしまつから
気を引き締めないとな。

作業台の上に浮いた二つのデバイスの前に立ってコンソールを操作
する。

さっさと終わらせて眠ろう。

今日出来る部分は全部終わった。

後は発注したパーツが届き次第、組み込んで終了。
部屋に戻ってベットに倒れる。

（あゝもう駄目）

久しぶりに眠れる事を感じ取った身体が急速に重くなってくる。

レグザを首から下げたままだけど外す余力はない。

あと2時間しか寝れないんだけど起きれるか…なあ……

『……………』

レグザの溜息が薄れる意識の中で聞こえた気がした。

目が覚めたら景色が違った事はこれで何度目だろう？
ベットからムクリと起き上がり目を擦って周りを見る。
アースラの中でも管理局でも、ミッドチルダのリンディ宅でもなかった。

「どこだ、ここ」

『地球です』

ベットの横にあった小さな台に置かれたレグザの返答。
いつの間に地球に？

『昨夜貴方が眠りに着いた直後、部屋を訪れた提督に運ばれました』

はあ、さいですか。

そういえば私服のまま寝たんだった。
着替えとかあるんだろうか？

フィンはタンスをしらべた

シタギがつまっている

何であるんだ？

あれ、でもこれ見たことないやつだ。

まさか新しく買ったのだろうか？

もったいない

風呂に入りたいがとりあえずリンディさん達に挨拶をしよう。

レグザを首に掛け、洗面所に向かって顔を洗い人の気配のあるリビングへと向かう。

ガチャ

「あら、フィンさん。おはよう」

起きたら部屋が変わっていてビックリしたでしょう？と笑いかけてくるリンディさん。

いえ、もう慣れてます。

とはさすがに言えず、ええまあと頷いとく。

「あ、姉さん」

「珍しく遅かったねフィン」

フエイトだ。

足元にはなんだか普段より小さくなった犬型のアルフが尻尾を振っている。

二人ともおはよう

って、遅かったね？

アルフの言葉に引っ掛かり時計を見ると9時を過ぎている。

『起こしましたよ』

先に言われた。

まあ昨日まで無理し続けて疲労のピークに達してたし無理もないか。テーブルにあったトーストを口に咥え、フェイトが用意してくれたコーヒーを持つ。

「そういえば、なんでここにいるんですか？」

トーストをコーヒーで流し込み、リンディさんに質問

「ああ、それはね」

要約

なのはを襲った相手が潜伏してる地点が地球ということが判明
その護衛と調査、犯人逮捕のため地球に臨時作戦本部を敷いたんだ
そうだ。

「アースラは？」

昨日まで普通に稼働してたのに

「アースラは今整備中だ。

地球に向かう途中に次元犯罪者を捕まえてね。
その際にちよつとな」

転移装置とかその他色んなところに不備が見えたらしい
へー

地球に来て嬉しいんで問題はないです。はい

第八話、おっさん小学校に通う

えーこんにちはフィンです。

ただ今、私はフェイトやリンディさん達と一緒に地球で暮らすことになりました。

時折フェイト達のデバイスを見に管理局に戻ったりしてますが、

「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しいお友達がこのクラスにやってきます。

しかも2人も同時にです。

2人とも入ってきてくださーい！」

地球で暮らすことになり友達が近くに感じられるからか、フェイトも大層喜んでいます。

私もフェイトが喜んでしていると嬉しいですが、

「えと、フェイト・テストロッサです」

「同じくフィン・テストロッサです」

今さら小学校に行くのはさすがに辛いものがある訳で、

「宜しく願います」

まして、女子の制服は辛すぎる訳で……

「「そっくりー!!」」

子供の中に混ざるのに凄く、抵抗があります。はい

いやね、何回かスカートを穿いた事はあるんですよ。

フェイトに勧められたり、アルフに勧められたり、リンディさんに勧められたりとかで、

でもそれはあくまで偶に程度の事。

普段はズボンで過ごしていたんだし、身体は少女な訳だし偶に程度ならいいかなと思う。

でも学校の制服、これは駄目だ。

どう考えても偶にじゃない。
毎日着るものだ。

これから毎日スカート……
死にたい

「すごいそつくり」

「どっちが姉？」

「どっから来たの？」

「日本語上手だね」

「前に住んでたところってどんなところ！？」

HRが終わった瞬間、人が一斉に集まりだして矢継ぎ早に質問が来た。

こんなに人が集まるのは初めてかも……

フェイトが目を白黒させている。

助け船を出すべきか、正直かつたるいしなあ

「はいはい皆して質問しないの」

せめて順番に質問すること！

2人とも困ってるじゃない」

金髪の少女、アリサだっけ？が間に入ってくれた。

アリサのおかげで何とかやり過ごした。

ありがとうアリサ、気のきく女の子って素敵だと思うよ。

クラスメイトからの質問は主にフェイトに任せ、俺は今朝の事を思いだす。

「え、俺、じゃない私は外されるんですか？」

仕事の話なので一人称を私に直す。

「ああ、今回の相手はロストロギアの闇の書だ。

これの特性として魔導師のリンカーコアを集めることでページを埋めて完成させようとする。

君との相性は最悪に近い」

君のリンカーコアを吸い取ったら、全部なくても一発で完成してしまおうとクロノ

「じゃあ私は何をすれば？」

「要請されない間は普通に過ごして欲しい。

襲われたら全力で逃げてくれ。

なのはが襲われた際も戦わずに彼女を連れて逃げることに

闇の書の完成は絶対に阻止しなくてはいけないんだ」

絶対にと強調するクロノ。過去に何かあったのだろうか？

「了解しました」

まあいいさ。正直どうでもいいし

クロノに敬礼して俺は部屋をでた。

そろそろ着替えなければ遅刻してしまう。

ああ憂鬱だ……

最近いい事が少ない気がする。

フェイトとなのはのデバイスを弄ってる間は楽しかったけど途中でまですしか出来なかったし……

あれ結局最終調整まで作ったの俺なのにマリーさんの手柄になるんだよなあ

あの人俺がいくら子供に見えるからって功績をチョコで譲ってもらおうなんて考えてないだろうな

「姉さん？お昼屋上で食べよ」

フェイトが話しかけてきてハツとなる。

いつの間にお昼に！？

今日の午前の授業はどうなった？

「え、とお昼ね。ちょっと待って」

鞆からフェイトが持つものと色違いの包みを取り出す。

俺の手作り弁当だ。

リンディさん達はこちらの世界の料理に疎く、フェイトは口クに作れない為毎食俺が作っていたりする。

何で作れるのか聞かれた時は焦ったが上手く逃げた。

フェイト達と共に屋上に向かう。

屋上が開放される学校ってまだあったんだ。

危険だから規制されたと思ってた。

「フェイトちゃん達のお弁当、すごい」

黒髪の少女、さすがが俺とフェイトのお弁当を除いて感想を言う。

一人暮らし歴約10年、その間ずっと作ってきたからね。

転入初日だけあって気合い入れて作ったよ。

「ほんとだ。これリンディさんが？」

「ううん。これは姉さんが…」

「フィンちゃん料理上手だね！！」

「ね、これと私の唐揚げ交換しましょ！」

「いいよ、はい」

「あ、いいな、私のとも交換しよう」

「私も交換して欲しいな」

「うん」

女3人集まれば姦しい、自分含め5人だけど

そっうえば初めて女の子とご飯食べてるな、俺

フェイトと何度も食べてるけど、フェイトは家族だしノーカンだよ。

「2人とも、初めての学校はどんな感じ？」

「えっと、年の近い子がこんなに沢山いるの初めてだから、なんだかもうグルグルで」

「直ぐに慣れるわよ」

「フィンちゃんは？」

「ん」。特に何も、俺はフェイトと違って少しだけ経験あるからね」

演習の時とか多くの同年代の人とやってたし、
同年代って言っても相手20代後半だけど、俺にとっては同年代。
うん、嘘は言ってない。

「ところで何でフィンは自分の事俺って言うの?」

アリサの質問、何て答えるべきか

「ん〜感覚的に使ってるから特に理由はないかなあ
フェイトが私って言うから同じようにするとわからなくなっちゃ
うってのもあるかも」

「たしかにそっくりさんだもんね」

「髪型が違うからわかるけど、もし一緒にしたら間違えちゃいそう」

「声も同じに聞こえるし、双子ってここまで似るのね」

「私もこの前会った時ビックリしたよ」

ああ医務室にいたときのことね。
にやははと笑うのは

「この前って?」

「えつとね——」

こうして俺とフェイトの小学校生活が始まった。
ああスカートの下から風が入ってきて変な感じする……

第九話、おっさんの一日 地球生活編？

俺、フィン・テストロッサの朝は早い。

朝4時30分に起床し、誰も起さないように気をつけながら家を出る。

何をするか？

走るんですよ。

まだ長時間の戦闘に耐えられる様な体力はないからね。

1時間程町内を全力で走り続ける。

当然魔力による補佐はしない、してしまうと鍛錬にならないからね。代わりに走りながら魔力操作の練習をする。

いくつか魔力弾をつくり、走りながらそれを高速で操る。

時間が時間なので人に見つかる事はほばないし、もし近くに来ててもレグザが教えてくれる。

走り終わって家に帰り軽くシャワーを浴び、朝食と自分とフェイトのお弁当の準備に取り掛かる。

前の人生では趣味として色んな料理に手を出していたので慣れたものである。

だって一人身だったし、栄養偏らない様に気を付けてたし、料理の出来る男の子ってモテるってなんかの本で書いてあったから、さ…

…モテなかったけど。

料理を作っているとフェイトが起きる気配を感じる。

いつも通りだとマンションの屋上で鍛錬に励むはずだ。

俺は冷蔵庫から冷えたスポーツドリンクを取り、ちやうど家を出ようとしていたフェイトに渡す。

「おはようフェイト」

「おはよう姉さん」

「訓練？」

「うん」

「はいこれ、いつもの」

「ありがとう、行ってくるね」

「30分くらいでご飯出来るようにしとくから」

「わかった」

ボタンと扉が閉まる。

俺はキッチンに戻ってお弁当の盛り付けの作業に戻る。

フェイトが起きたという事はそろそろリンディさんが起きてくる。

リンディさん用に紅茶の準備をしておく。

お湯は沸かしてあるのでそれをカップに移し、カップを温める。

リンディさんの味覚はちよつと異常なので濃い目に入れ、軽く温めたミルクを入れ、大量の砂糖を投入してテーブルに置く。横には広告を抜いた新聞も用意しておくのを忘れない。

ちようど置いた瞬間にリンディさんが入ってきて挨拶をしてくる。

「おはよう、いつも早いわね」

「おはようございます」

席に着くと湯気の出る紅茶を取り、手を温めながらゆっくりと傾ける。

「ん、とてもおいしいわ」

花丸、と微笑むリンディさんにありがとうございますと返してトースターにパンを入れる。

確か今日のリンディさんの予定は朝から会議だったはず、リンディさんの分の朝食は出来ているため皿に盛り付けてちょうど良く焼き上がったパンにバターとジャムを塗りたくってリンディさんの席に置く。

「どうぞ」

「ありがとう。ふふ、今日も美味しそう。いただきます」

おっと、そろそろフェイトが帰ってくる頃だ。

俺はフェイトと俺が使用している部屋に戻ってフェイトの着替えを用意する。

といっても、下着と学校の制服なんだけど

「ただいま」

フェイトが帰ってきた。

いつも通りシャワーを浴びて制服を着てリビングに来てリンディさんに挨拶をして自分の席に座るフェイト、その前と一つ横の席に出来あがった朝食と冷えた牛乳を置く。

最後にテーブルの横にアルフ用のご飯と水を置いておく。

どうやらアルフは人型での食事より犬型での食事の方が楽であるらしい。

元々が犬だったからだろう。

フェイトに起こされノロノロとした動きでやってくるアルフに笑み

を溢した。

朝食を食ベリンディさんを見送り、テーブルにクロノとエイミィの分の朝食（多分昼食兼用）を置いて俺は今通っている聖祥の制服を着る。

スカートには未だに慣れない。というか慣れたくない。

一応小さな抵抗としてスカートの下に短パンを穿いているが足がスーするのとは変わらない。

まあ捲られても安心程度である。

フェイトに今日の分のお弁当を渡してアルフに行ってきますと言って2人で家を出る。

「そうだフェイト、今日学校終わったら本局いきな。バルディッシュ直ったよ」

高町なのはのレイジングハートもね。確かなのはは今日、リンカーコアの件で本局の医務室に行く予定だった筈、一緒に行くといい。

「わかった。結構時間掛ったね」

2日3日で直つてはいたんですよ実際。

でも2機が何やら面白い注文を付けてきたもので日数掛ったんですよ。

いや、中々に楽しい仕事だった。

結局マリーさんの手柄にされたのは残念極まりないが……

「ちょっと新しいシステム組み込んだからね。詳しくは本局で聞いて」

「うん。あ、なのは！」

フエイトが待ち合わせ場所にいたのは達に声をかけて走る。俺もその後を小走りで追い掛け横に並んで3人に挨拶をする。5人並んで話しながら学校へと歩き出す。誰かと一緒に登校とか前はなかったなあ

授業中の時間を使って魔法の練習に当てる。

正直小学校程度の問題など退屈以外の何物でもない。

仮に当てられても軽く答える。

だが体育や調理実習の時間は別だ。

日々の訓練のおかげでオリンピック選手並みの記録を出せてしまうため全力では出来ず、力加減を誤らない様に常に気を張るためマルチタスクが出来ない。

調理実習もマルチタスクを使って他の事と同時にやろうとすると包丁で指を切り落としかねない。

お昼休みになりいつも通り5人で屋上で各々お弁当を広げる。今日は調理実習があったため、軽めのものをつくっている。それを食べながらワイワイと雑談

「すずかのとこまた猫が増えたんだって」

「今度は三毛の子猫なの」

「みたーい!」

「じゃあ今日家に来る?」

「あ、今日はちょっと駄目なんだ」

「なんか用事？」

「うん。大事なものが壊れちゃって、それが今日直るの」

「私も」

「フェイトも？」

「うん。なのはと同じで修理に出してたのを今日取りに行かなくちや……」

「そっか、フィンは？」

「ん、俺は大丈夫だけど……」

あんま話をする人間でもないし楽しくはないと思うんだけど

「じゃあ偶には3人で遊びましょ？」

「あ、フィンちゃん私の家わからないよね？今日一緒に帰ろうっ？」

「ん」

「何か用事あった？」

ま、いつか。猫好きだし

クロノにメールで帰りが遅れることを伝えておこつ。

夕飯はエイミィさんに任せるとしよう。

一応少しは教えてあるし。

友達の家か、何年振りかな

「うん、大丈夫。行くよ」

「決定！！」

家の掃除とかは明日でいつか。

そう思いながら俺はウサギにカットされた林檎を手を取った。

そっぴいば女の子の家とか初めてじゃなからうか？

なのは家に挨拶に行った時は喫茶店で家って感じじゃなかったし

……

まずい少し緊張してきた。

「じゃあねフェイト、なのは」

「うん、また明日」

「ええ」

午後の授業を終え、なのはとフェイトと別れ俺とすずか、アリサの3人は黒塗りの高級車に乗ってすずかの家に向かう。

率直に言うとなすずかの家は豪邸だった。

2人のメイドに挨拶をして（主人のすずかの姉は不在だった）、すずかの部屋に入る。

猫、ネコ、ねこ。

部屋のあちこちに何匹もの猫がくつろいでいた。

「驚いてるけど、ここにいるのはこの家にいる猫の一部よ」

なんだと！

この家では一体何匹の猫がいるというのだ！？

部屋の猫たちはすずかに近寄って甘える。
随分と懐いているようだ。
う、羨ましい……

「ん？」

一匹、すずかに近付かない猫を見つけた。
真っ黒の子猫だ。

品種とかは分からないので真っ黒の子猫としか表現できない。

「すずか、あの子は？」

「あ、その子も最近拾ったの」

「へへ真黒な子ね」

「まだ怖いのか懐いてくれないんだけどね」

「ふん」

俺はその黒猫に釘付けであつた。
ゆっくりと近づく。

「あ、気を付けて！その子乱暴さんだから」

成る程、確かに黒猫はこちらを威嚇している。
でもこの猫は怖いんじゃない。
猫の金色の目を見て何となくわかる。
この子は

「プライドが高いだけなんだね」

威嚇を続ける黒猫に手を伸ばす。

この子はこんなにも小さいのにとっても誇り高い、そう思った。
だから黒猫の目を真っ直ぐに見詰める。

手が黒猫の頭に触れる。

「あたたかい……」

さらさらとした毛並みもとても気持ちいい。

黒猫は目を閉じ、俺の手に頭を擦りつける。

甘えるというより、認めてくれたという感じがする。

「フィンちゃんが気に入ったのかな？」

とすずか、

「気に入ったというよりは認めてくれた感じ」

多分この子にとって抱かれたり甘やかされたりするのは嫌な行為な
んだろう、と感じたことをすずかに伝える。

頭から背中まで丁寧に撫でていく。

ああ気持ちいい

やっぱり動物は良いなあ

アルフの毛並みも触り心地良かったけど、この子はこの子で気持ち
いい。

まあ一番はフェイトの髪の毛なんですがね。

うむ、脊柱が気持ちいい。

すずかとアリサの3人で話している間ずっと黒猫（ローレンという
名前らしい）を膝の上に乗っけて撫でていた。

冬だけあって日が暮れるのが早く、5時にはお開きになった。車で送ろうかとアリサが言ったが、買うものがあるからと言って断った。

確かそろそろトイレットペーパーの予備が危ういはず、それにアルフ用のご飯も買わないと、ああシャンプーの詰め替え用も買わなくては……

そんなことを考えながら商店街へと足を運んでいると、周囲の色が一瞬で変わった。

『エマーゼンシー
緊急事態』

レグザが警戒せよと喚起する。

どうやら敵が来たようだ。

クロノがくれた敵の資料を脳裏に浮かべる。
最も注意すべきはなのはのリンカーコアを抜いたあの魔法。
あれをやられるとお終いだ。

他の戦闘要員は防御に徹すれば何とでもなる。

エイミィさんに連絡した。その内クロノが来てくれるはず。

『接近警報』

「数は？」

『1』

「資料の何番？」

『1』

槌の赤いのか

レグザを起動してバリアジャケットを纏う。

誰にも見られないからって毎回裸になるのは嫌なんだが、仕様らしいから仕方がない。

俺のバリアジャケットは黒いパンツスーツ姿だ。

左手に銀の籠手、右手は黒のグローブを付け、両足は左手と同じく銀の脚甲を付けている。

『3追加』

レグザの連絡、3は確かアルフとやった男だ。

2対1か、とりあえず先制攻撃しておこう。

背中にクリアブルーのアクセルフィンを展開、接近してくる方向に飛翔しレグザを構えて突っ込む。

接近戦に長けたベルカの騎士。

接近して戦うミッドの魔導師をどう思うだろうか？

第十話、おっさん動く

高速で2人の敵に接敵する俺は後5メートルにまで近づいたところで止まった。

何故か？

相手に戦意がないと判断したからだ。

アルフと戦った男が白い布を掲げその隣になのはを襲った赤い少女がいた。

戦闘する意思はないのかその振りをしているのかは分からない。

少女はデバイスを持っていなかったが、男は素手で戦うようだし油断はできない。

周囲に魔法の痕跡もないから魔法によるトラップはない模様。

最も注意すべきなのはリンカーコアを抜いた存在だが、自分のリンカーコアにある仕掛けをしておいたので多分何とかなる、そう判断した。

「俺に用、だよな？」

俺だけを補足するために結界を張ったと思われるためそう言った。相手が武装していないからといってこちらがそれに合わせる理由にはならない。

俺はレグザを構え、周囲に誘導弾を4つ作る。

「ああ、そうだ」

男が短く言った。

男の後に少女が続ける。

「願いがあつてきた」

「願い？」

今まで多くの人間を襲った奴らが今さら何を？
そう思う俺の前で少女と男が土下座をした。

「頼むよ！アンタの魔力をくれ！！

全部なんて言わない！少しでいいんだ！！

闇の書が完成すればはや、……あたしらの主が助かるんだ！！」

額を擦りつけて少女が叫ぶ。

声から必死さがわかる。

演技ではない……と思う。

嘘を吐く人間は何人も見てきた。

醜い社会を生きてきて、少しだけ嘘をついている人間がわかるようになった。

絶対とは言い切れない。

「その願いを叶えてやれるか直ぐには判断できない、とりあえず顔を上げる」

このままでは話も出来ない。

「俺を襲わなかった理由は知らない。

俺の魔力が欲しい、か。なら俺に事情を話せ、話を聞いてそれで判断する」

いまだ地面に手足を付けたままの少女をレグザを持たない手で立たせる。

少女が立つと男も立った。

「話をするつもりがあるなら今すぐこの結界を解け、そしてお前らの仲間を全員呼べ」

少女が自分で立つと虚空を見上げる。

どこかにいる仲間に連絡を取っているのだろう。

数秒後、周囲を囲っていた結界が消える。

「すぐに仲間が来る」

男が言う。

それはまずいね。

クロノやなのは、フェイトがきつとすぐに来る。

「いや、仲間はここに呼ばなくていい。

管理局員がここに来るはずだ。今は追われない様に逃げるなりして身を隠せ」

連絡先（魔法による通信用）を教えて貰い、明日どこか適当な所に呼ぶ事を告げ2人と別れた。

「レグザ今のことは誰にも言つな」

『誰にも、ですか？』

「ああ」

『明日は一人で行くつもりですか？』

Yesと言ったらクロノに報告しそうだな……

「いや、フェイトとアルフを連れてく」

我が妹なら管理局に囑託の身だが言い含めれば黙っててくれるだろう。

アルフに関してはフェイトを言い含めれば済む。

『2人では不足です』

「ならなのはとユーノも連れてく、これなら大丈夫だろ？」

なのはもあいつらと話したがってた、話す機会を態々逃がしはしないだろう。

ユーノは管理局員という訳でもないし、それでも何とかいうようならケージに突っ込んでなのはの家に置いておけばいい。

『……了解』

レグザは釈然としないようだが渋々了承した。

レグザは管理局員のリンディさんから貰ったものだ。

彼女の下に会話記録が飛ぶように設定が施されていた。

デバイスマスターの資格を取ってレグザの中を見てその事を知り、切っておいた。

その事に関してリンディさんから何か言われたことはないので問題はない筈。

全くあの人は笑顔で何考えてんだか……

レグザに念を押したところでエイミィさんから通信が入る。

通信に軽く答え、これから買い物して帰るんで少し遅れますと伝えた。

「姉さん本当に大丈夫？」

さすがに戦闘直後（だと思っている）の俺を一人にしておくのを危険と考えたのだろう。

商店街の所でフェイトとアルフが来た。

敵が複数人で結界を張った様で結界内部の情報は一切わからなかったようだ。

フェイトやアルフ、それになのはにユーノ、クロノは結界を破ろうと試行錯誤していたらしい。

全員での一斉攻撃で破ろうとしたところで結界が消失、犯人たちを探すも搜索網を掻い潜ったようで見つからなかったことをフェイトに教えて貰った。

『ねえフェイト、明日時間ある？』

通常の会話では拾われる可能性がある。

一般人は気付かないが周囲には管理局のサーチャーがある。

内容を盗み聞きされない様にプロテクトを固めてフェイトに念話を繋ぐ。

『何姉さん？珍しいね姉さんが念話をするなんて』

フェイトの返事にはプロテクトが掛っていない。

まあ念話にプロテクトを掛けるのは結構相性によるモノがあるらしい俺は楽に出来たがフェイトには難しいのかも、プロテクトの掛け方を知らない可能性もあるけど…

『念話で返事はしなくていい、頷くとかジェスチャーで答えて』

フェイトは何でそんなことを？と言うような顔をしたが何も言わず

に頷いた。

「アルフ、アルフのご飯買うから好きなの選んできていいよ。
俺とフェイトで他に必要なものを探すから、レジの前で待ってて」

「わかったよ。じゃあ後で」

アルフは目を輝かせて走り出す。
邪魔者排除完了

『明日、なのはを襲った今回の事件の犯人たちとクロノや管理局に
秘密で話をする。』

一緒に来る？なのは達も呼ぶつもりでいるけど』

「フェイト、シャンプー内にあるので大丈夫？気に入らないなら違
うのに変えようかと思ってるんだけど？」

『！？』

「え、っと大丈夫だよ。私あんまりそういうの気にしてないし」

念話の内容に驚いて表情に出すもこちらの目を見てゆっくりと頷く
フェイト、いきなり過ぎたかとちよつとだけ後悔。

『場所とかはまだ決まってるから後で伝える。』

アルフにも伝えておいて、もちろんクロノ達には内緒ね』

「あつと、洗剤はここか…レシーブはつとあつたあつた」

洗剤を籠に入れて振り返る際にフェイトが頷くのを確認。

「後は何？」

「うーんと、トイレットペーパーかな」

『ありがとうフェイト』

最後にそう伝えて買い物に専念する。

あつ二枚組は駄目だよフェイト！二重のものは高いし、つい一枚の感覚で長く使っちゃうんだから！！

「さて、と」

エイミイ作の夕食を食べ終えてからなのはに携帯メールで事情を伝えた。

なのはの答えは考え通りのものだった。

ユーノも5人で行くのであればと折れたようだ。

（後は……）

皆が寝ているのを確認し、ある事をする。

体内で使う魔力は感知される事はないのは既に確認済みだ。

これをやると俺の髪が青く輝く、

同室のフェイトとアルフに気付かれない様に布団に包まり光が外に漏れないようにする。

「……アクセス」

俺は小さく呟いた。

第十一話、おっさん伝える

カラン

「すまない、待たせたようだな」

喫茶店のドアから4人の男女が現れ先に座っていたこちらへと歩いてくる。

「いや、まだ時間前だ。こちらが早く来ていただけに過ぎない。気にするな」

「そうか」

4人用のテーブル2つをくつつけた席に4人が座り、各々必要最低限の自己紹介を済ます。

一応席順をいっておくと右からなのは、俺、フェイト、アルフと並んで座り、

その前に赤い少女、ヴィータ、4人のリーダーらしい紫の髪をポニテールにした女性、シグナム、金髪の優しそうな雰囲気漂わせる女性、シャル、守護獣と呼ばれる使い魔の男、ザフィーラが座っている。

ユーノ？フェレット状態でテーブルの上にいますか？

ウェイトレスさんがこちらをチラチラ見てくるのはきっとコイツのせいだろう。

「さて、互いの名前も知ったところで本題の話に移ろうか」

「何を聞きたい？私たちに話せることなら話そう」

話せない事は一切言わないと伝えてくるシグナム。
まあ、主の情報は言わないつもりなんでしょう。

『貴方達の主は誰ですか？』

フェレット形態の為普通に喋れないので念話で言ってくるユーノ。

「ユーノ、ふざけた質問は一回しか許さんからな」

ユーノに警告をしてシグナム達に頭を下げる。

全くこの生き物は、相手が喋らないことを態々聞くなよ。
次なんかくだらないこと言ったらケージにぶち込んで喫茶店の外に置いてやる。

『え、なんで！？』

吃驚した顔のフェレット、コイツ本気で分かってないのか？

「聞きたいのはお前たちの持つ闇の書の事だ。」

お前らは闇の書をどういうものだと思ってるのか、それがま
ず知りたい」

なのはに慰められるフェレットをウザいな呼ばなきゃよかったなと
思いながら4人に言う。

俺の質問の意図を気にしたシグナムとシャルがなぜそのような事
をと視線で聞いてくる。

「俺の考えで、なんだがお前ら守護騎士？の持つ闇の書の情報とこ
ちらの持つそれとが大なり小なり異なっていると考えているからだ」

それを整理したい。

俺がそういうと、10秒ほど経ってからシャルマルが小さく呟きだした。

【・闇の書は666ページからなる魔導書で、そのページを埋めるには他の魔導師の魔力が必要である。

・闇の書が完成することで闇の書の主は絶大な力を得て、願いが何でも叶う。

・主が死んだ場合、闇の書は次の主を探し出しその下へと移動する。】

以上がシャルマルの言った言葉である。

概ね管理局と同じ情報だが、彼らにはない情報がこちらにはある。

「やはり、知らなかったか」

彼らも闇の書の一部という話だったし違和感を持たない様に情報を制御されていたのかもしれない。

そう考えるとこの4人もただの加害者とは言い切れなくなってくる。

「知らなかった、とはどういうことだ？」

ザフィーラが腕を組んでこちらを睨んでくる。

そのきつい視線にフェイトとなのはが若干怯えてる。

俺は2人の手を軽く握って大丈夫だと励ます。

「我等の知らないことを貴様らが知っているというのか」

ザフィーラの後を継ぐかのようにシグナムが言う。

こいつら話してる相手が子供である事を理解してんのかね？してないか。

してるのは多分シャル位だろう。今も二人に落ち着くように言ってるし、

「少なくとも俺は知っている」

強い視線に真っ向から俺は答える。

「一応俺も管理局員だからな、昨日あの後情報を集めた」

尤も局員では知り得ない情報も手に入れてるけど
俺が管理局員である事を知り、急に周囲を警戒しだす4人。

「安心しろ、ここにいる人間以外には誰にも今日の事は伝えていない」

信じらんないかもしれないけどな。

「大丈夫、嘘は言っていないみたい」

周囲の探索でも行っただのかシャルが言い、ようやく落ち着く。

「で、何を知ってるってんだよ」

メロンフロートのアイスを全部食べたヴィータが口を開いた。
今まで静かだと思ったらずっとメロンフロートのアイス食ってたのかよ！

まあいいや話を戻そう。

「お前らの魔導書が闇の書と呼ばれるようになったときからそれは壊れてんだよ」

大きく言ったつもりはないが店内に俺の声が響いた。

「「「「なっ！！」」」」

「「「えっ！！」」」

『そんなっ！！』

俺以外の全員が驚く。

一応補足しておく、そんなっ！！て驚いたのはユーノね。

「そんなバカなこと！！」

「あたしらはそんなこと知らないぞ！！」

シグナムとヴィータがテーブルを叩く。

おいおい客は他にもいるんだぞ。みんなこっち見てるじゃんかよ。

俺は周囲に頭を下げる。

「お前らが知らないのは多分、闇の書が意図的にその情報を与えていないんだろ」

「そんな証拠がどこにある」

「ならお前ら、闇の書が完成した後の記憶はあるか？主の願いが叶った瞬間を見たのか？」

.....

「ないだろう？過去の主が魔導書を弄った結果、魔導書には致命的なバグができ、そのせいで闇の書と名前を変えた」

「元々の名前は……？」

シャルが恐る恐るといった感じに質問してくる。その問いに俺は小さく答える。

「元の名前は、**夜天の魔導書**」

俺の言葉を聞いて、4人の瞳に涙が現れた。

突然の涙になのは達も驚くが俺はそれを無視して話を続ける。

「致命的なバグ、それは魔導書が完成した時に表に現れる」

「それは？」

「主の精神を乗っ取り、ただ破壊のみをまき散らす存在へ変質させる」

[illegible]

「10年ほど前にも一度、闇の書は完成している。」

その時に一つの世界を破壊し尽くし、助けに向かった管理局員も何人もやられた。

最終的にある一人の局員が自分の身を犠牲にして闇の書を破壊した。

だけど闇の書は破壊されると同時に新たな主の下、ここに現れた

って訳だ」

「そんな……」

「じゃあ、はやては助かないのかよ」

「我等のしてきたことは……」

「……」

絶望に打ちひしげる4人、そしてそれを悲しげに見るなのはやフェイト達。

「今日はここまでにしよう。」

お前たちは驚く事が多すぎたろうし、俺らはそろそろ帰らないとまずい時間だ」

注文票を取り、代わりに懷から小さなメモをシグナムの前に置く。

「続きが出来るようになったらそこに連絡しろ。俺の携帯電話の番号だ」

そう言うてなのは達を連れて（ユーノの首根っこを掴んで）会計を済ませ、俺達は店を出た。

おっさんの休日

とある休日の午前9時、

（せっかくの休日に俺は一体何してんだか……）

視界に映るのは迫りくる六つの光弾。

それを最小限の動きと斜めに構えた薄いシールドで弾いて避ける。
だが、光弾は誘導性があった。

「……」

相手の魔導師が何か呟くと俺の背後に言った光弾が大きく弧を描いて再度こちらに向かってくる。

デバイスでその光弾を切り捨てようかと思ったが、今日はデバイスや一部の魔法の使用は禁止されている。仕方ないと小さく息を吐いて他の対処を考える。

思考すること0.2秒、

「よし」

どうするかを決め、身体を低くして光弾を操る魔導師に向かって走り出す。

こちらが接近してきた時の事を考えていたのだろう。相手は砲撃魔法を放ち、さらに三つの光弾を作りだしてこちらに放つ。

だが、こちらも相手がやすやす自分の接近を許してくれるとは思ってはいなかった。

直線的の砲撃を避け、正面からこちらに迫る三つの光弾、それに向けて走りながら拾っておいた石をいくつも投げつける。

魔力弾の特性として、何かに当たると爆発、当たったモノに爆発の衝撃を与える物が主だ。

向かってくる光弾が投げた石に当たる。

魔力弾が爆発、その衝撃で石は爆散し、白い煙が薄く立ち昇る。

まさか石をぶつけてくるとは思わなかったのだろ。後ろに回避しようとしていた相手の動きが止まる。

「！」

その隙を逃さず魔法を発動させる。

身体に魔力を通し身体能力を一時的に上げる。

これは発動こそ早い、身体に流す魔力量と身体に掛る負荷の大きさが比例する魔法なので使用する者はほとんどおらず、危険でもある為魔法の専門書に軽く載っている程度である。

世間的に大きく知られていないというのは大きなアドバンテージになる。

知っている魔法、というのは対処法もある程度考えれるが、知らなければどうしようもない。実際に見てから対処を考えなければいけない。

だが、そんな思考をさせてやる必要はない。

魔力を自分に耐えられる限界、その一歩手前程の魔力を身体に流し込んで跳ぶ。

そして相手の背後にまわり後ろから首を掴んだ。

一瞬、自分の身体を覆う魔力が相手にも見えただろう。

でも見えた次の瞬間には相手の首に自分の手が届いている。

抵抗されないように手足をバインドで拘束。

ついでに手首を蹴ってデバイスを落とさせる。

これでもう何も出来ない。

俺の勝ちだ。

「——そこまで！なのはちゃん、フィンちゃんもお疲れ様、上がって」

「あうゝ負けちゃった」

「お疲れ」

「最後のアレ、何？フェイトちゃんのブリッツアクションより早かったよね！いつの間にか後ろから首掴まれてビックリしたよ」

「あれはね——」

なのはに掛けたバインドを解いてゆっくりと地面に降り立ち、なのはと今の模擬戦についてあれこれ話しながら演習室を出た。

この後は今の模擬戦の反省会、その後にフェイトとの模擬戦だ。なぜこんなことをしているのか？なのはとフェイトのデバイス、レイジングハートとバルディッシュが直ったんでその性能テストと俺の戦闘力を見るためらしい。

一応空戦A+ランクで登録されているが、それは使用できる魔法の数が少なく、また魔力の扱いが雑だった頃に行ったテストの結果だ。今やったらどのくらいできるのか、それを見たいんだそうだ。

一人だけの力が見たいらしく、俺のデバイスは魔力制御の補助をしてくれる為使用は禁じられ、また遠距離からの魔法攻撃も禁じられた。

（多分クロノが禁止させたな）

直径10メートルの誘導弾（しかも弾速かなり早い）に追い掛けられたのが余程嫌だったのだろう。

テストが終わったときあんなのに当たったら非殺傷設定でも死ぬとか言ってたしな……死ぬわけないのに、いたるところの骨が折れたりするだろうけど

「姉さん！なのは！お疲れ様」

演習室から出るとフェイトが待っていた。

「はい、これ」

そう言つてフェイトは俺となのはにドリンクを手渡す。
気の効いたいい娘だ。

ありがとうとフェイトに感謝しドリンクに刺さったストローを口に咥える。

うん、程良く冷えてて美味しい。

「次は私とだね」

フェイトは楽しみだねとニツコリと笑う。

正直戦闘は汗かくし、疲れるし、怪我するかもしれないから嫌なんだが、嬉しそうに笑うフェイトの顔を見て諦めた。

出来るだけ早く終わらせたい……

「じゃあフェイトちゃんとの模擬戦終わったらまた私とやろうね！」

「えっ」

「なのはの後、私としよう姉さん？」

「えっと」

「じゃあその後に2対1の模擬戦やろう!」

「アルフとユーノ、クロノも入れて3対3でもやってみたい、かな」

「組み合わせはどうしよっか?」

「2対1の時は一通り組んでやってみよう」

「うん!私このことユーノ君達に話してくるね!」

「ちょ…」

何回やるつもりなのこの娘達、元気すぎるというか訓練馬鹿というか……

っ…かなのはさんや、反省会まだやってないよ……

「新しくなったデバイスの性能テストにどんだけ時間掛ける気だよ……」

帰ったら布団干したりベランダの花に水あげたり家の掃除しようと思ってたのに……

結局この後20戦ほどやることになり、家に付く頃には日は落ち切っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7455q/>

魔法少女リリカルなのは～おっさん転生による影響～

2011年4月8日06時28分発行